

哲学の現実態序説

—『饗宴』研究—（その三十）

伊集院 利 明

第六章 夢中説夢（続き）

30 大文字の物語の脱物語化に向けて

表題のもくろみのため本節では、一、大文字的ということの意味内実について、二、大文字的なものの生における拡散と大文字的なものと小文字的なものの間の関係、バランス、三、大文字的なもので前節に挙げたものとは別のものがあり得ないのか、の三点の疑念、問題点についての解明を与える。

（一）とりあげられた三つのものは「大文字的」と名のるにはあまりにも現象的と思われるであろう。しかし、先にも述べたように大文字化でも統持のそれであり、現象性を完全に排したものは統持の大文字化としては失効する以上、何らかの現象性は必要である。こうした条件の下では小文字性の払拭が出来る限りの形でなされることをもって満足するよりない。そして、ここで小文字性として考えられているのは、ものであることにともなう変転性、見通しのきかなさ、局面性、個別性である。個別性はそれ自体が様々な制約を課し、ものがある一定の面からあらわれてくる以上、私にはその全体像を一挙につかむことはできず、その、そしてそれと私のかかわりの展開可能性は見通し得ない。これに対して、

その理念化は、現場への作動力をもったものでも、理念化として、小文字性を脱却する動向性をもつことになる。それは理念としての概念的な通覧性とその現場への適用性、それを明確に基軸として活動が展開されることによる安定性、理念としての生全体に対する支配性をもつことによる非局面性をもつ。理念がこうした大文字性につながり、言葉が理念への通路である以上、言葉、理念に基づく団体、ある理念的営為の相続性は、まさにこうした統一性、安定性、理念性、総覧性を実現している。

大文字性が生において求められているようなものであることを先に言及したが、それはここでより一層明確になっていると言えよう。我々は自分の生を何らかの形と程度において統一しようとし安定化させようとする。我々は生を理解しある程度の一定の指針の下に生を納得しようとするが、このことのためにはそうした統一性、安定性への指向が欠かせない。大文字化への指向は生に内在していると言える。さらに、重要なことだが、この点において統持がその結晶化自体においてすでに大文字性、大文字化への動向を内在させていると言うことができる。統持は生の全体に関わる。統持においては出会うということが生の全体を決めるその相において問題となり焦点化され、それが結晶化される。出会いということによって、そのことの見通し難さによってではあれ、それによって生が貫かれていることの統一性の把握、感得が結晶化には欠かせない。そしてこの統一性への指向は、結晶化についての先の論においてしばしば強調してきたように、能動性、自覚性によっている。統持の結晶化がこうした総覧性、統一性を持つものである以上、それはある種の大文字性を秘め、自身の大文字化への動向を懐胎したものであるという言い方が出来る。このことは次節でさらに裏付けるが、後の方でかなり重要な意味をもつことになる。

(二) 前節で大文字的なものが様々な程度の実現性において生に散りばめられていることが述べられた。このことの原理上の概観はすでに与えられている。まず統持自体が前々節で論じたように通常の出会いと連続性、連動関係を持っている。また、そこで見たように我々の通常の生自体がそうしたことの主題化への動向性をもっている。そして我々の生が様々な局面で一定の安定化を指向することを考察してきた。これらのことを考え合わせれば、原理的に大文字的なものの拡散は当然のことと言える。これをもっと具体的次元で確認しておこう。

前節で挙げた三つのもの自体がかなり拡散性をもったものに見える。そうであるからこそ先の第一の疑念も生じたわけである。言葉にも理念にも様々なものがある。理念の団体へのそしてその各種の継承等への反映にも様々なものがある。まず、団体、言葉などは統持のあり方を理念的に色濃く反映することが原理的には当然可能であり、グレードを持って様々な微弱な反映形態への展開があるはずである。これは単に原理上のことではない。言葉について言えば、言葉について原理上あり得るということは、現実的に存在し得るということとほぼ同じであるが、様々な組織においても現実性がある。第29節で見たように統持の理念、生の個別性、具体性の先鋭化の理念は多くの宗教団体等の理念と連動するものであり、その理念的反映には強めのものから微弱なもの間の様々な形態があり得る。それどころかもっと言えば、例えば会社組織のようなものも微弱ではあるとはいえそれなりにそうしたものの反映を有していると言える。つまり、人間的な事業が様々な面から理解されとらえられ得ること、そしてそれが相互に多様な形で連動し得るものであることを考えれば、そうしたものも、平たく言ってしまうと、見ようによっては統持が示すようなこの世界での人間のあり方を理念化した「人間性」のようなもののそれなりの現実化としてとらえることができる。営利性の

強い事業も含めた様々な事業が様々な人間の営みにかかわる以上は何らかの形で人間の福利等にかかわり、現実人間にかかわる以上、そこにそうしたものの何らかの反映があることは当たり前のことである。またさらに言えば、上の「見ようによれば」の「見よう」というのはある程度調整が可能であるし、現実には多くの人は調整することで自分を納得させている。そして会社組織の活動というのは人間活動の場であるから、それと理念の見え方の適合によってはそのかなりの具体的な感得を与え得る。また、言葉について言っても我々はかなりの程度において社会的に与えられた出来あいの美辞麗句、決まり文句、励まし言葉によって生きている。我々の生の実態についてこれを完全に否定することは難しいように思える。それらの言葉が流行の決まり文句のようなものである場合さえも上にあげたような統持的な要因の反映を完全に欠いていると考えることはできない。そもそも人間性に向き合った人類の長い歴史の積み重ねがそれなりには反映されている以上、真実が多少とも含まれていて不思議ではない。そして第三の形態についても二つについて見てきたことが当てはまることは明らかに思える。我々の生において自己物語はかなり満ちており、それは様々な形態をとるものの歴史性と関連を持ったものが少なくないであろう。

二
二
一
(三) もう一つ疑念となり得ることとして、統持の反映された大文字的なものとして前節に挙げた三つ以外のものがあり得ないかという問題がある。正直に答えるならば、三つは私が思い当る限りで挙げたものであり、それ以外の可能性について慎重に検討したわけではない。物語の叙述で問題であったのは大文字的なものの没落の経緯を描くことであった。そしてとりあげられた三者についてそれぞれの固有の事情はあるものの没落の根本的要因は同じである。大文字的なものであっても統持の大文字化で現象性をそなえたものである以上、小文字的なものの力が顕

現してくることは避けられない。きわめて単純とも言える理屈が事柄の本質である。三つのものとは全く異種、異次元のものがいいのかと問われるならば、あり得るようには思えないと答えよう。どの点で異質であろうと、統持の大文字化として問題になるもの、統持の大文字化として現象性をそなえたものであるならば、上の事情は同様に成り立つはずである。世界に現象する限りでは、現象のあり方に関する生の根本的構造が変わるわけではない。

31 小文字 - 大文字 - 小文字

この物語は、かりにそれが正しいとして、そして現実を反映したものだとしても、一体何を意味しているのだろうか。大文字、小文字という余計な概念装置を増やしただけで話は実質的には元の水準にとどまったままなのではないか。そしてもともと大文字化と言っても統持の大文字化である以上ははじめから没落が運命づけられていたとすれば、これは茶番劇にすぎないのではなかろうか。 - - まず、物語が生の実態、構造にいかんが即しているのかをより詳しく見ていく。それによってそのことが、茶番性、無意味性の疑念の払拭に直結するものであることを明らかにし、「物語」が単なる物語や思想などではけっしてないことを示していく。明らかにされつつあるのは、我々に与えられているのが、小文字から大文字へと指示してそこからまた小文字へと折り返す運動であり、大文字の真実とは、小文字的なものが大文字的なものを指向させつつ、小文字的なものへと自らを解消する運動のうちにあるということである。大文字的なものは大文字的な次元のうちで固まるのではなく、むしろ小文字的なものへと回帰する。

大文字の希求と生の構造、実態との結び付きについていくつか指摘してきたことをさらに展開しよう。大文字的なものの希求の必要性、ない

しは必然性を、統持が大文字性を懐胎すると先に提起したことをさらに深めることを皮切りに明らかにしていき、そこから、大文字的なものと小文字的なものとの緊張関係が我々の生に満ちていることを示すことで、物語の現実性の主張を裏付ける。

まず、統持がある種の大文字性をもつことの構造をより克明にしよう。生の全体にかかわる形で出会いを焦点化するという統持の結構のあり方自体がこの点について無視できない力を持つことになる。統持の生成においては生、偶然性、限界性を見渡しとらえ感得する垂直軸の運動性が蒸発性の平面へとおろされ実効化され、そこで様々な感得等の適合が生じることが統持を成り立たしめていた。しかし、両軸の交叉が核心とはいえ、垂直軸の運動性はそれ自体で重要であり、統持の発生において構成的である。統持の生成について論じたように、能動性がそれとして自覚的に作動せねばならない以上、垂直軸の指向は一定程度の独自性をもって立ち止りの時間の現実的幅をもって作動しなければならない。垂直軸の運動は出会を出会いとして見、生を生として見、生の偶然性、出会い性を問題化する運動である。ここには生を全体的なものとしてとらえ見わたし、生の統一性を希求する方向が強く働かざるを得ない。統持は積極的な適合性のうちにおこるが、何らかの安定した積極性の存在は生を全体として生きようとするにおいてどうしても要請される。そうした形の積極性によって垂直軸の運動も活性化されるのであり、垂直軸の重要さと適合の積極性の重要さは連動する。適合の積極的気分は積極的気分である限りにおいて当然自己を維持しようとする。こうした事情からして、安定性への指向は無視できない力を持つことになる。

統持について見たこうした事情はある意味一例にすぎない。ある意味では典型的事例であるが、むしろ安定化への指向は、ものの個性、偶然性がそれとして問題になる統持においてさえあると言うことにも適切性

がある。垂直軸と水平軸の関係が幅広く我々の生の諸局面において様々な形で過ちの現象をまきおこすことになることは、本章の前半が追求してきたことである。統持が卓抜なものではあっても、どのような場面においても生を生として、全体として問題化する垂直軸の思考は働く。我々がもともと持っている生の安定性を希求する指向はこうした運動性により大きく強化され意義づけられる。統持の小文字性、破局の可能性に対して第21節から疑念が突きつけられ、それへの回答が企てられているのだが、破局的事態がそれに限らず重い問題であること、これは当たり前のことではあるにせよ、その問題性の深みが明確になりつつある。我々は少なくともある程度においては大文字的なものに言わばすがって生きようとする志向を持たざるを得ない。あなたの隣に失恋で絶望している人がいた場合、あなたは何かこの世界の根本的な構造の中に彼に与えられるような救いとなるものがないか、必死で見出そうという気になるであろう。

前節で大文字的なものの拡散を論じたが、上の論により大文字化の傾向が統持の場合に限らず我々の生の中に散りばめられていることが一層明らかになった。それに関して、ここでは我々の生のうちにおける大文字的なものと小文字的なものとの間の緊張関係に焦点を当てて論じたい。「散りばめられている」という言葉が示唆する以上に現実的にはより幅広く実態的なもののように思われる。例えば、会社事業のようなものも見ようによってはそれなりに崇高な理念の現実化としてとらえることができるかと先に述べたが、そのような「見よう」がされることにはある種の必然性がある。と言うのも、我々は生を生として問題化することにおいて生の見通しを持つこと、一貫性を持つことを何らかの程度において指向するが、この根本動向が、組織というものがそのような「見よう」を許容するようにできているという別の個所で確認した事情、そして事

業に何らかの理念的なものや善性の反映があることに満足を得るという動かし難い事実に合致され強化され強い傾向性が形成されることになるからである。これらの事情はちょうど連動するように出来ているのだ。とりわけここで、個別的なものの小文字性の発揮する危険性は重みを持つ。その偶然性が生の様々な力の源泉であっても、それは様々な形で我々を揺さぶり、重みのある破局のある可能性をもたらす。そして組織について述べた事情は、当然、言葉についてもあてはまる。言葉が我々の生に見通しを与え、理念等と関連付け意義づける、最低限の役割を越えて、上に述べた合致の事情と、とりわけ小文字的なものの危険性は、言葉を呪文化する動向をもたらす。

我々が小文字的なものの鋭さを緩和させてバランスをとろうとしていることは明らかに思える。第28節の統持の一般性の主張が正しいとすれば、それだけでも、統持の結構の核となる働きをするところの様々な偶然性の鋭さ、諸限界の重さ、それに由来し連動する破綻可能性の威力、小文字的なものの小文字性の力、そうしたものを我々が非顕在的ではあれある程度感得するのは当然のことであり、この危険性の威力を暗暗に感じそこから目をそむけようとするのもまた当然である。そして生の実態において我々が小文字的なものの場における様々なものの限界、偶然性の鋭さを理念的なものによって和らげようとしていることも明らかに思える。我々は様々な物語で自己を理解し、自分の属している組織と自分との連関についてもそのようなかたちで自分を納得させようとする。大文字的なものと小文字的なものとの間の緊張関係は我々の生をかなり支配している。こうした事情にまつわるもので、ある程度なじみ深いと言える例の一つに、恋愛感情や失恋感情および恋の断念のさいに見られる事業等への没頭、逃走がある。肯定的な気分の没頭の場合と反対の逃走の場合には気分のあり方に明らかに共通性があるように思えるが、

これは大文字的なものと小文字的なものとの関係をかなり雄弁に物語っているように思える。つまり、小文字的なものの危険性は常態的なものであり、我々の大文字への希求の動向もまた同様である。逃走的没頭は単に特定の個人のことを忘れさせるだけでなく、世界の一つの面から目をふさがせるわけである。もっとも、逃走と言っても所詮は生の中から生の中への逃走である以上、後者の忘却についてはなかなかうまくいかないだろう。結局は小文字的なものは力を持ち様々な局面で「ことはおこる」（そのおかげで特定の個人についての忘却はしばしば成功する）。そしてそもそも我々は事業に、生を生として感得させることにつながるような理念の反映を求める。なお、こうした事例に限らず大文字的なものへの依存にはある程度の逃走性があり、そこには衝動性が伴う以上、ここには熟慮の欠けた飛び込みの生まれる可能性がつきまとう。これはある種の浅薄さの一因となり得るであろう。高尚な、人類が培ってきた知恵なり上流階級の伝統なりを色濃く反映した理念に従っていても、生の実態においてはそうした浅薄さ、具体的にはできあいの言葉や組織への心理的依存の可能性が常につきまとうことになる。

「物語」がこのように生の実態、構造に即したものであることが示されたことは、その物語性と茶番性についての疑念に対する解答になっているように思える。物語性については、それが生の実態を如実に反映したもので単なる「物語」でないことを示しただけですでに十分であるが、後にさらにいくつかの点を付け加える。茶番性についてはじめに簡単にまとめると、展開の避け難さ、高尚な目をまきこむ普遍性、そして事柄の持つ深刻さはそれを茶番とする見方を覆す力を十分に持つ。敷衍しよう。

まず、ここにある小文字的なもの→大文字的なもの→小文字的なもの（以下略して、小 - 大 - 小と記す）の運動性はある種の内的必然性を持つ

ている。小文字的なものは大文字的なものへと差し向ける。大文字的なものは結局のところ小文字的なものの鋭さを一層顕在化させる。もちろん、そうしたことが目的論的にもともと仕向けられているわけではないが、それは逆に、生の偶然性、限界の突きつけをよけいに強める。ここにおいて避け難さはいわば逃走後の逃げられなさの相において現出する。

避け難さという点では、大文字的なものへの依存の現象の普遍性が注目される。この避け難さは、茶番ととらえる目をも、そしてそうした目をもつ人をも巻き込んでいく。そして大文字への指向性において人をして自らが統持的な小文字性の次元をすでに凌駕しているのだという幻想へといざないこむ。場合によっては目をそらすことが、様々な理念が支配する場への安住によって安定することはあり得る。しかし小文字的なものの力は様々な形で違和感を与え続けることになる。先に述べた浅薄さのつきまといの現象はそうした力の一つのあらわれである。

考察を通じて小 - 大 - 小の運動性が明確な意味を持ったものであることと深刻さを持ったものであることが明確になりつつある。この運動性の持つ意味は、我々の生きる世界の小文字性の鋭さの突きつけの先鋭化である。この突きつけは運動の前半における大文字的なものの希求の力によってよけいに鋭さを増す。大文字への依拠は一つのまどろみであり、避け難さをもった言わば超越論的なまどろみである。そしてその鋭さにおいて、この小文字性のつきつけは茶番であるどころかむしろ身をすり減らす運動である。具体的な現象、個別的なものへの定位を離れての高尚な決定的開示というものがないことの打撃の強みがこの運動には含まれている。希求された安定性、個別の場の危険性を超越した安全性が、打ち碎かれる。

このことの重みはさらに大 - 小 - 大の運動がいったん帰還すること

において終わるという性質のものではないということの持つ現実性、常態性において、より鋭いものとなる。統持の場合にかぎらず、小文字的なものとかかわりにおいては、安定化の志向、大文字的なものへの指向は働き続かざるを得ない。我々は人生の習得を卒業して済ますことはできない。これが底と思っているうちは底ではない。運動は常に私のまどろみを破り続ける常態的な運動、まどろみのなかにとりのこしながらそれを破り続ける運動である。

現実性、重み、常態性の明確化により、茶番性、物語性への疑念が払拭された。以上の論さをさらにもう少し展開して統持に関する一つの重要な帰結を明らかにし、ついでに物語性の払拭についてももう少しポイントを付け加えたい。

統持の小文字性の問題から論が発出しながらも、小 - 大 - 小運動が統持の場合に限らないより一般性を持ったものであることも明らかにしてきた。しかし、それでもこの運動と統持との関係にはやはり独特の密接さがある。統持が様々な結晶化の中でも卓抜なものである分、そして統持が生の偶然性の相における全体性自体を問題にするものである以上、垂直軸と水平軸の交叉における垂直軸に独特の強みを持つ分、この運動が統持において先鋭化され则认为することは当然のことだが、それだけではない。統持というもののあり方そのものが言わばもともとこの小 - 大 - 小運動にかかわっている。というのも、そもそも偶然性を問題化するという、出会いを出会いとして問題化するということが、ものの個別性、もののもの性自体の問題化と別のことではない。つまり、統持とはもともと他ならぬ小文字の小文字性自体に関わっている。ある意味では小文字性の重みを受け止めることが統持の出来に他ならない。にもかかわらず、いや、だからこそ大文字性への指向は重みをもつ。もともと破綻するべくできているような大文字性への指向があた

かも茶番に見えるのは事態を外から他人事のように見る目にとってのことにすぎない。我々が生をそれとして理解しようとする、態度をとること、そうしたことのうちに縦横の軸が交差し軋轢を生むこと、そのことの中にしか生はない。統持は大文字性の希求とともに小文字の世界を生きることへの差し向かいの運動性に他ならない。 - - この言葉を別の言葉で言えばまた次のようになる。先に小 - 大 - 小の運動がいったん小に帰還することでもって終わるようなものではないことを述べたが、それが1ラウンドで終わるような性質のものではないということは、つきつめて言えば、この運動が統持の生成自体の中に含まれているということでもある。統持が縦軸の、安定性への希求の動向を懐胎した運動性において小を小として受け止めていく運動であるからこそ、小 - 大 - 小運動はそこにもともとはられまた運動がそれにとって特別な重みをもってくるという言い方ができる。そしてこれは物語性についてのもう一つの回答ともなる。この運動は統持の形成を待ってその後でつけ加わるような後からの話、エピソードではなく現在進行形の実話である。いや話というよりはものが語ることそのものであり、小文字的なものの実声なのである。

小文字的なもの、小文字性の突きつけの運動の意味が統持の実態とともに明らかにされた。後でさらに展開されることになるが、この運動は哲学の運動自体とある種の一体性、連動性を持っている。小文字的なもののつきつけは先鋭化させられるべきものである。まさに小文字の小文字性をうけとめることこそに統持の運動性がある。我々はそのような形で、もっと言えば、まどろみつつもつきつけに向かう形で世界へと生きることが要請されている。そして差し向けの運動についての叙述自体が（またもや先と同じような形での）世界への哲学の介入である。叙述自体が生現場での生へのさしむけである。別の言い方で言えば、統持の

生成における垂直軸の運動こそが生を生としてとらえ問題化主題化する運動である以上、それ自体が哲学の運動の萌芽、あるいは現実の生における哲学自体であると言える。統持は哲学的な運動性である。一方でこうした思考性自体がまたまどろみの可能性をひらくものとなり得るが、ただし同時にこのことはものがものとしてそのまま問題になるという現出がさらにつきつけられることになるということでもある。

小 - 大 - 小運動の意味が明らかになることによって統持の一般性と運動性がより明らかになった。ものとしてのもののつきつけとともに統持はある。統持はそのような運動である。そうである以上、我々が当たり前のような形で大文字的なものに接し、そのような形で小文字的なものの鋭さに対して安らぎを得ていること、そのことのうちにすでに統持の運動性は含まれている。統持をこのように一般的なものとしてとらえること自体が統持の運動の一翼を担い、統持を起こしていくこととも言える。それでも根本は小文字的なものそのもののうちにある。そして哲学はその力の結実である。大文字というようなものがもしあるとすれば、それは小文字の指し示す運動のうちにあるしかなく、小文字の声のうちにあるしかない。名もなき小さな星たちの輝き、それこそが北極星なのだ。

32 とりまとめに向けて

過ちの転についての考察のとりまとめにかかろう。本節と次節は、第34節以降の本格的なとりまとめの導入を行う。本節ではいままでの成果の上に立って取りまとめの大枠の方向を指示する。次節では転に関連する様々な諸経験を考察し、取りまとめの考察に推進力を与える。

本節では、これまでの論の整理と、これからの課題の提示、方向指示を手短に行ってから、二つの重要な概念を提示することで方向付けを拡

充し、その上で転にまつわる諸経験についての導入的説明を行う。

第27～31節の論を通じて統持の一般性を明らかにした。統持は出会い一般と連動性、連続性をもち、価値の生成の場に位置をしめ、生の幅広い局面における大文字性、小文字性の間の緊張関係と連動性、連続性をもっている。統持の局面性について第26節で提示された疑念がかなり払拭されつつある。同時に、そうしたことから、生の様々な局面に転的なものや転の萌芽があるにしてもそれらが統持と何らかの連関、連続性をもちそれらの中で統持がある種の中心的な役割を持つことが明らかになりつつある。

成果の一方でいくつかのことが課題として浮かび上がってきているように思える。第一。統持を軸とした過ちの転の考察が生幅広い局面に拡散していることを主張するのなら、それを示すような転的经验の現象で統持的经验そのものではないようなものが何かあるのか。第二。統持の経験が大文字問題につきまといわれ、転の経験として決定的ではないとすると、転の経験として他に何か決定的と言えるものはないのか。第三。第27～34節の考察から浮かび上がってきたことの相互連関、また鵠外型の恐れや苦の経験との関係はいかなるもので、それらにどのような意義があるのか。第四。第三で問題になっている総合的構造の中で統持の中心性がどのように位置づけられるのか。第五。他的全体的性ということが何回か主張された。これは、第三、四で問題になっている生の構造連関の中でいかに位置づけられるのか。その中で他的全体的性ということがいかなる意味を持つのか。第六。過ちの問題として重要であった脱力性の問題がいかに解決されるのか。第七。転の思考、もっと言えば過ちの思考などというものにそもそもどのような意味があるのか。

第一について言えば、ここまで論じられてきた統持の一般性からすればそのような経験は当然あってしかるべきである。そしてそのようなも

のは実際はかなりあるように思える。我々の生のきわめて多くの局面において明確な転、根づきでなくともそれへの道が開ける経験、様々な形で偶然性の問題が関連する諸問題とともに輻湊化する経験があるということ、そのことを第33節において具体的ないくつかの例をあげながら示す。そのような経験が日常性の次元に拡散しながら、転の経験に連続し、統持の経験の一般性と呼応することで、転の一般的実在性を裏付けることを示していく。

第二について言えば、そのような決定的なものなどはないと主張する。大文字 - 小文字関係の問題性において、より安定した大きなものの希求が打ち破られるということは、それを強く示唆している。実は決定的なものがないということを決定的に示す論拠があるわけではないように思える。しかし、いくつかの点から有効な裏付けを得られるように思える。本論では転の決定的経験も、生の決定的肯定性も決定的な瞬間などというものもなく、様々な軋轢、否定性との連関のうちにこそ深みがあるという見地において、転、他者の全体性といったものが、さまざまなより微細な諸項目の連関においてとらえられることを論じていく。

第三～七の点はまさに課題となることだが、それらはいまの二つとの連関も視野に入れ、総合的に考察されねばならない。以上から、第34節以降の課題が次のように整理される。

- ・ 決定的経験などないという主張を何らかの形で裏付ける。
- ・ 統持の拡散、小 - 大 - 小運動、鵠外型の恐れ、逆転認知の結合、第33節で扱う諸経験、こういったものの相互連関構造を整理し直し、その意味、意義を明らかにする。
- ・ そうした関連の中で統持の中心性がどのように位置づけられるかを明確化し、とりわけその転に関して、統持の拡散性が統持自体のうちに懐胎されていることのもつ意味と重要性を明らかにする。

・過ちの考察全体にいかなる意義があるかを整理しながら、他の全体性の意味を明確化し、肯定性の安定性に関しての洞察を深める。

・転、他の全体性の経験の諸要因を整理し直す。

- - ほばいま挙げた順の通りに進行していく予定である。

さて、こうした見通しの下でさらに論に支柱を与えるために、ここで二つの概念を提示しておきたい。二つとも哲学的体系的な概念というよりは、論の指示を明確化するための符号に近いものだが、そのための有用性の大きさからあえて導入するものである。

一つ目は「所有」の概念である。これまでの論から、過ちと転における私のあり方として、1、自分がかかわる特定のもの、その意味で自分のものであるようなものとの関係の重要さ、2、ある一定の限定された場、所にあることの重要さ、3、私がさまざまなものや出会いによってあり方を決められるという受動性、所相性、の側面が浮かび上がってきた。この3項を総合する言葉として「所有」という言葉を与えておきたい。この導入はあまりにも言葉遊びのように映るであろうが、とりわけこうした諸項目のうちで、具体的ものとのかわりの決定性を確認するためかなりの有用性を持ったものと思える。ついでに言うならば、これは「有時」の「有」との連関も視野に収めたもので、第七章における有時の再考察への連結のための有用性ももっている。

第二は「鏡玉性」という概念である。

出会われてくるものはものとして私にとって貴重であり、私の生とそれには、私にとっての決定的貴重さがある。宝玉である。しかし、私を越えた存在者、あるいはあり得るかもしれない将来の大きく進歩した私の目に、そういったものがいかにとらえられるか。私のいまの生は十分なものではないかもしれない。ものとそれにかかわっている私の生の宝玉性はこの点からするといかにとらえられるのだろうか。

豚は黄金より藁を選ぶというたとえを、瓦一宝玉と重ね合わせてみたい⁽¹⁾。豚は藁を選ぶと言う時、我々は我々にとっての黄金こそが価値があるという見地に立っている。ここでは、我々は宝を手にはしているのだとする立場からの視点と、もっと上の目があり得るかもしれないという視点とが交叉している。前者の目がなければ我々はこの言葉をそもそも理解できないことに注意したい。それぞれものに各人にとっての重みがあることの理解は実際に本人が重みを自分のものとして具体的に感じる事がなければ不可能である。人間すら神から見れば猿のように見え黄金すら藁のように見える。しかしそれでも我々は黄金を大切にする。この視点の交叉において超越的視点を想定しつつも自分の生と自分がつきあうものを大切にするのだということの重みが突きつけられることにおいてある種の全体性が開示されること、そのことの重要性を提起したい。つまりその重みの把握、そうした重みに生があるという、生のあり方そのものの、それと全体的問題性、構造性が、一つのものにおいて映し出される。そしてそうした映し出すものとして一つのものが貴重になる。これは、藁のような黄金であり、瓦のような鏡である。もっと言えば、瓦としての鏡玉、藁のままであるところの、鏡としての黄金である。瓦はそれが瓦であるというまさにそのことにおいて、全体の構造の中においてそれを反映する鏡となる。――この提示はまだ概念整理的なものにすぎない。転にまつわる諸項目とより具体的に関連付けることで、その重要性を明らかにしていかなければならない。

最後に、次節で考察する諸経験について、断りを述べておく。ここで挙げるものはいくつかの例にすぎない。おそらくは、これに類したもので転に連なるものは、ここに挙げたものとはかなり異種のものも含めてより多く見出されるであろう。ここで取り上げたものの選定の仕方になりバイアスがあることも明白である⁽²⁾。しかし選定の恣意性はむしろ

ろ現象の多様性の証左にもなるものであると言えよう。多様性の主張に説得力を与えることこそがここでは重要であるということをもって拙い弁解としたい。

33 転に関連する諸経験

33-1 let it be

これは単なるあきらめの気分としてあり得るし、処世訓的なものになさざるやうなものでもあり得るが、また肯定的でかつ深みを持った、生の全体性についての感得でもあり得る。

典型的な例としては、死に瀕したさいのものがある。自分にはもう何もできない、あるがままを受け入れるしかない。これはそれほど幅と深みをもたない単なる消極的なあきらめでもあり得るが、たいていの場合はもっと深みをもつ形で起こり、様々な形で各種の深い洞察感得と連動し得る。少なくとも、死に面する場合、自分の人生全体が問題になっていることの視から、生を生として問題化するような深みへの何らかの動向があるのが自然である。またここには、自分はとにかく生きてきたのだ、そのこと自体は打ち消せないのだという事実性への感慨が起こり得る。さらに自分が今おかれている状況、偶然性への感得の、いま述べた諸感得洞察との連動における先鋭化から、ものの小文字性、世界の偶然性が自分につきつけられていることが感得され、それが事実性の感慨とあわされて、そのような小文字的で遇然的なものとかかわりの場こそが生の実感の場であることの顕現となり、これは世界への根づきの運動の卓抜化ともなり得る。これこそが生なのだという肯定感、否定感の中のかつそれを基盤とする肯定感、まだ生き続ける場合の感慨と連続し得る、つまり、連続性をもったものとして実感され得るし、実態的に二つには類縁性がある。これから生きるにしても自分の出来ることは限ら

れている。自分は様々な偶然性や気まぐれに翻弄されて生きる。処世的に対処され得ても根本的な揺らぎは力をもつ。しかしそのような限界を生きることが生であり世界の中で生きることなのだ。このような生を私は引き受けて生きるのだ。そして死においてもそのような形で生きられてきた生が自分の生として受け止め直され感得し直されるのであることに立ち向かわれる。だからと言ってなんだと言うのだ。いや、むしろそうであるがゆえの深みである。Let it be は肯定的な響きの fiat でもある。さらにこれはそうした人生そのものを俯瞰的に見る視自体の展開可能性の限界、関連性の感得とも連動し、鵑外型のおそれとも連続性を持つ。そのような形で徹底的に限定的に他的に与えられているのが私の生の全体であり、他的全体的なのだ。だからこそ生においては選ぶしかない選択肢を自分から選ぶことが英雄的なことであり得る⁽³⁾。

Let it be にはより処世訓的形態もあり、それも深みの感得と連続性連動性を持ち得る。錯綜した事態の内側で悩むよりもある程度つきはなした態度で外から見る視点をとる方が自分が楽になる。自分が悩んでいるということ自体もそれとして見る態度を取ることで、事態の事業的進展がはかどる。おそらくこれが人間の心理学的な実情なのであろう。しかし賢者の言葉 words of wisdom の wisdom はしばしば処世訓の次元にとどまらない展開動向性をもっている。If something worries you, let it worry you. こうした励ましの言葉は、活動、業務の遂行に有益なものであるが同時に結局我々が世界のものと翻弄されること自体とその問題性をつきつけることになり得るし、超然とした態度も、水平面上に卸されそこで各種の齟齬をきたすのであり、そうした構造の現実化の重みをその言葉自体がつきつける働きをし得る。大人になっても卒業はできない。深浅はここでは連続連動するという以上に、連続性連動性があるように世界は出来てしまっている。

肯定 - 否定、深 - 浅の二つの軸で構成される空間を let it be は揺れ動いて展開する。この揺れ動き自体をもが let it be の源であるところのものの力、世界の力がもたらすところのものである。そして動性の中でそのこと自体もがまた感得されてくる。Let it be をもたらした力がそれを揺らす力であり、let it be 自体の中にこうした動性が含まれるが、また、こうしたこと自体が平面上の展開として更なる深みをもたらす。Let it be 自体も last word ではない。この非特権性もまたつきつけられてこざるを得ないのだ。

33-2 双極的気分

Let it be の肯定相と否定相として見たようなものは、様々な場面にある。

統持の形成の考察で、肯定性がある種の相としてあらわれることを論じた。相と言ってももちろんそれは見よう次第でどうにでもなるような見え方ではなく、世界の事象、世界のものととの遇然的、偶然的な諸関係等によって支えられ形成されていくものである。しかし、この相のあらわれが肯定否定の諸要因を複雑にかかえた上でのものである以上、そこにははかなさ、変転性が、そしてまたある限定された程度の操作可能性がつきまとう。統持とのある程度の安定的関係の段階においても世界全体の見え方は様々な揺らぎを伴う。そしてまた統持的なものの生における拡散の諸局面もこうした事態を当然かかえているのである以上、生の多様な諸局面において気分の双極性は生の深みをのぞかせるものたり得ることになる。

世界は、大地は、焦点を結ばず像を結ばない。私はそこに血肉を持って力を入れて踏み出しているが、力を込めるための確固として基盤がない。私の力はそがされ、ずらされていく。すべては意味をなさない

(signifying nothing) たわ言のようだ。

それでもそのような他的なものに根差している生がそれとして肯定され得る。脱力性をもたらす様々なものの小文字性、世界的事物の遇然性はまた、世界の深みそのものである。世界的な人や事物の一つ一つが、そしてそこに生み出される齟齬すらもが、世界の深みの表れである。世界は驚きに満ちている。それこそひげをそってほほを少しだけ傷付けてしまうことすらが生の輝きであり、世界は小さな神に満ちている。

我々の生の日常に様々な程度において双極的気分が存在していることについて特に証拠をあげる必要はないであろう。もちろんそのうちの多くのものは、生についての深い感慨と結び付くとはかぎらない。しかし統持的なものの弱められた諸形態の生への様々な拡散、小文字 - 大文字関係の生の諸局面における存在を考えれば、そうした諸要因はいま述べたような双極的気分の、あるいはそのより萌芽的形態の機縁となる以上、生の日常に散りばめられている様々な双極的気分の形態が、深みのある生の感得、転の経験に連なる動向と連続性を持つと主張することは十分可能である。

いま問題になっている二つの相のあらわれは時間的に変転するものである。こうした変転もが世界の鋭さであり、そしてまたこのことの感得自体もが今問題になっている気分を深める、あるいはその勢位を高めることにもなり得る。そして、両者の変転の鋭さは様々な形態と程度において世界に満ちている。世界の摩訶不思議さが両者の鋭い対立変転を招き得るが、また、それを緩和させ和らげさせ調整する力を持った、そしてその機能が世界と人間との関係の様々な複雑性、輻湊性によるものであるだけに、いかに働くかが我々には決して見渡せないようなものも世界には備わっている。しかしその不可思議さもまた、世界の不可思議さ、遇然性の鋭さである以上、感得のされようでは気分の鋭さ、深みを増大

させしめる⁽⁴⁾。

33-3 楽しいと自分に言い聞かせること 生の中から生の中への逃走 など
幽霊性について指摘したように、我々はやる気の出なさの気分自体をもととしてそれを積極性の気分へとしていかなねばならない。力が入れないことを転化して自分の力として生きねばならない。統持の結晶化の、対成立の、先鋭化された形態においてこれが転の経験と運動することは前に明らかにした。当然、この運動の経験は統持と様々な出会いの諸形態の連続性や小 - 大 - 小運動の広範性をかんがみるならば、先鋭化されたものから微弱なものまで様々な段階のものがあることが考えられる。明確な先鋭化された形のものでなく、ごく日常的な形で、我々が「楽しいと自分に言い聞かせる」ということをかなり体験していることは明らかであるように思える。そのたいていの場合においてそれが生の深い感得と明確な結びつきを持たないことは確かであろう。我々はとりあえず生きていくため、その場を切り抜けるため、あるいはやりすごしていくための必要性に迫られている。もっと生全般にかかわる場合でも「うじうじしていても何も始まらないではないか」といった態度とりは文字通りそれだけのものに終わることが多いのであろう。しかし生に対する態度とりは、生を生としてそれに向かうものである以上、生をある程度その全体性、全体的問題性の相において視野に収める動向性をそのうちにふくむ。ここには感得の深化の胎動がみとめられることは当然考えられる。多くの場合に「元気を出す」こと自体が、「自分の人生じゃないか」「たった一度の人生じゃないか」等の思いと結び付くことは事実であろう。生の局面性やその時々ごとの必要性に取り紛れてその感得が硬直化してくることが多いにしても、深化への動向性があり得ることも否定しがたいはずである。様々な齟齬の実感、無意味感の実感のなか

で、それに能動的態度をとることで、態度をとることそのことを世界全体への向き合いとして感得し、自分の大地として実感すること、これが言い聞かせの中で、生の深みにつながり得る最も典型的な形と言えるが、やる気の出なさ自体をやる気の源としていくこと、楽しいと言い聞かせることの諸現象は様々な展開相をもって生の中に満ちていると言える。

こうした言い聞かせはある意味逃避的だが、向き合いと逃避が一体であることの感得でもあり得る。

逃避については先に（第31節）主に失恋の場合における生から生への逃走として問題にした。こうした逃走に言い聞かせと同質のものがあることは明らかに思える。たしかに我々は小文字的なものの鋭さを、その中の具体的現実的な齟齬を、回避する。そして、具体的現実的な齟齬の可能性から目をそらす。しかし、目をそむける、そらすという言葉が与える印象ほどにこれは消極的ではない。これは分散する私をなんとかとりまとめ世界に身を処する仕方であり、逃走といっても生の中への逃走であり、それだけでなく、多くの場合、結果としてそうであるという以上にむしろより自覚的な形で生の中への逃げ込みである。かなりの程度に自暴自棄でも、生は私についてまわるし生の中で様々な「ことがおきる」ことそのこと自体が自分の生から自分が離れられないこと、何らかの形でそれに対せねばならないことをつきつけてくるであろう。

一生懸命頑張るということ自体が生からの生への逃避であり得る。これはある意味真剣性をもった逃走であり、全力で走ることとしての生への立ち向かいである。つまりここでは、逃走すること、走ること自体の身体的感覚の中に生の核心があり、また、感得される。そしてそれはさらに事業の実感と重ねあわされる。事業自体が走ることである。逃走の現場自体が、偶然性の、小文字性の世界なのだ。

33-4 hic et ubique (幽霊的現出)

「幽霊的」と言ってもここで扱うものは転の肯定性で問題にしたそれとは局面、意味合いがやや異なる。

ここで扱う現象は広範さを持っているがまず少し限定した場面で話を始める。第三章での「美の海」の海性の考察で、ものとこととの関係を問題にしたが、そのことから、さまざまなものの間の独特な同質性と異質性の関係を考えたい。この「海」においてはものの個別性がそれとして重要でありながらそのことにおいてすべてが一様化される。統持もこうした同質性と異質性の関係を基盤として生い立っている。ここでは、この同質性の、あるいは同質性と異質性の関係の問題がやや不気味な相でもって、もっと言うと、同じようであることの既視感と、異質性の併存の、不気味さを伴って現れ得ること、そしてさらにそれがより日常的な場面での既視感、不気味さの実感とも一定の連続性を持ち得ることを考察したい。

本章では垂直軸のものが水平面におろされて実効化されることの持つ問題性を執拗に追求してきた。いま上でとりあげた垂直軸でとらえられる同質性が何らかの形で水平面におろされて実効化されることが可能であることは明らかに思える。もちろんものとの間のごく普通の類同性の認知は個性、個別性の感得を逆に破壊してしまうであろう。しかし、先に巡回性の打撃の経験、感得が勢位のその都度の高まり等にもかかわらず類同性を持ち得ることを考察したが、同様のことは当然ここでも考えられる。違いの実感、個別性の実感というものは、個別性のそれであるにもかかわらず、我々の対応のあり方、状況との関連など様々な点において複雑な形で類同性をもちうる。

この類同性の感得には、その重みととらえ難さとの連結に由来するある種の不気味さの付きまとい、あるいはその可能性があるように思える。

個別性、偶然性の生にとっての重みにもかかわらず、類同性の実感が生じる地点を我々は見通しているわけではない。これは統持の形成における感得の適合の地点が本人自身には見極め難いものとなることと、事情は同じである。複雑で、生の全体に関わる重要性を持つものである場合ほど、こうした適合、合致は複雑な地点に入り込む。このとらえ難さは、ある種の既視感のような不気味さを生むであろう。私が見ているものは確かに前に感得したものであるが、どの地点でどのようにであったのかを私は推し量ることができない

「海」で問題にしたような同一性の把握は垂直軸で問題になることの一つの局面にすぎない。垂直軸で問題にされる様々な事柄は水平面での感得として賦活化されることになる。そこには適合の地点の見極め難さにもとづく既視感、不気味さの相の現象が起り得る。

今日の自分は昔の自分ではないにもかかわらず同じようなことが降りかかることの不思議さについて以前の個所で言及したが、いま問題にして見極め難さはこうした不気味さの要因をなしている。そこで問題にしたような「もう卒業したはずの試験を受けねばならない」というような不思議さの実感は生にかなり満ちている。そうした違和感は様々な要因と結び付いて様々な変種を作るであろうし、この節ではじめにとりあげた個別性の感得にしても、個性、偶然性というものがそもそも生の様々な諸問題と密接に関連し連動性をもつものであるだけに、それについての不可解さの実感は、いまとりあげたばかりのものとも連動性と連続性をもって様々な形態や程度の変種をきわめて多く生み出すはずである。巡回性の打撃に関するそれとの関係についても当然のことながら同様のことが言える。そしてそれらは種々の程度において、日常的なごくあたりまえの既視感と連続性をもつであろう。日常的な既視感ですらその不思議さの実感が生の不思議さ自体の感得や問の投げかけにつながること

も、少なくないように思える⁽⁵⁾。

はじめのところで、ここでとりあげる幽霊性が、転における肯定性のかき集めのそれとは意味、局面が異なるものであると述べたが、一方でかなり重要な連続性、連動性、類縁性があることも主張できるように思える。どちらの幽霊性も、適合の地点等や、かき集められるものの見極め難さにもとづいている。またここにとりあげたものは、かき集めという形ではないものの、感得のためのある程度の能動的構えの形成を必要としており、営為性との連動の点で両者はかなりの類縁性をもっている。また垂直軸と水平面との各種の関係性、それがここにあげた幽霊性のもとなるのだが、それが過ちと転の源となり、様々な問題の間の連動連続関係をまきこんでくるのだから、両者の間に連動的関係があること、そして実質的に連繋において生起することもわざわざ論じるまでもないはずのことなのだ。

こうしたいま問題にしている不気味さの現象は生の様々な場面に、それこそ幽霊のように出没する可能性を持ち、また、深みへと我々を引きずりこむ動性の可能性を秘めているのである。

33-5 遅延 未遂⁽⁶⁾

第8節において時間の脱臼性に言及した。私はことを構える前にすでに世界に踏み出しことを始めてしまっている。私が世界にこれから対処することのあり方が私自身に見通しがきかない形ですでに方向づけられている。さらには、見通しのきかなさ自体に構えを取るあり方の要因すらもがすでに既定されてしまっている。私の動作自体を私は私から遅れて始める。私は私に早まっていると同時に私は私に遅れている。時間の脱臼は単に私が私に先駆けるという私のあり方の構造を名付けたものではなく、私が見通しのきかないものの展開可能性に委ねられること

の問題性と連動した、いま生きている私が感じる齟齬感覚、具体的時間ずれの感覚を指示している。

このずれ感は、当然のことながら倦怠感、力のそがれ感とも連動する。垂直性と水平性の関係の中に生まれる齟齬、過ちの構造がその根にあり、力のそがれが過ちの、単なる構造ではなくその実現態に根差している以上、遅延感はそれと連動性を持って現出する。そして遅延感は力の出しきれなさ、踏み出しきれなさにおいて自分がことに対してぐずぐずしているという実感と重なりあうことになる。ことが進まぬことに対する焦り、苛立ちは、具体的な事物が自分にとってある意味で疎遠になってしまう時間帯においては、自分の生の全体性を主題化することを活性化することにもつながり得るであろう。遅延の現象を支えていた根そのものが、漠然とした形においてではあれ、感得され得る。平面上の齟齬が、生を見る見方の垂直性の深まりと連なっていく。それによってずれの平面が自分の生きる生であることは余計に突きつけられるのであり、平面と垂直軸との関連自体が突きつけられてくる。しかも時間的ずれにおいては、すでに踏み出してしまっている私と遅れている私が言わば併存し、遅れる私は垂直的思考をもって現れるのであり、二つの軸の関係自体が平面上のものとして実感される。かくしてここでは過ちの構造連関自体がこの平面で生きられるものとして突きつけられることになる。過ちの構造連関自体の時間平面軸上での顕現化、それ自体がこの世界で生きられるものとしてつきつけられるのであり、そのようなつきつけをもつものとして、この遅延の現象はかなりの程度の卓抜性を持っている。そしてここでは自分の生がなんとなく他人事のように感じられながら、だからこそよけいに、切実なものとして迫るということになる。これは単なる生からのステップバックによる視点から生まれるよりは現実の平面上の時差において展開されることによって重みを持つことになるのである。

遅延により何かをせずにいることは、何かせずに済ませていることでもあり、これは未遂性とも連動する。せずに済ませた現在の私に「生とはこのようなものなのだ、ひょっとしたらこういうことをしていたかもしれない、それが生というものなのだ」というある程度俯瞰的な視点が伴う場合、ここでもやはり、してしまっていたかもしれない私と、現にある私の両者において、上に見たように水平性と垂直性とが重なり、その関係性自体の平面上での展開が現出するのであり、この構造自体とこの構造自体の感得とその中で深まる生の感得を深めていくことに力を与える。かくして遅延について述べたのと同様のことがここでも成り立つことになる。生を見ること、そうした劇性こそが事態を成り立たしめているという意味においては、未遂は未遂の劇であり、未遂の劇は未遂（の生）である（同様に、遅延は遅延の劇であり、遅延の劇は遅延（の生）である）。見る私と見られる私の両者が平面上のものとして生きられ、そしてまた、生きられるものとして見られることによって生きられるのだ。俯瞰的に見ることと現実の時間的展開が連動することでこの生の時間の指向に含まれる様々なものの切り口の鋭さが突きつけられてくる。現実の時間内で展開されるものとしての劇性が開示されるのだ。

注

- 1 この個所で使用している例、喩えは、ヘラクレイトス、道元からの借用であるが、あくまでも用語の借用にとどまる。
- 2 権威に依拠した論と映ることをおそれる。
- 3 以前に言及した、フォーティンプラスを自らの意思で王に推挙するハムレットである。
- 4 こうしたいわばリチウムの自然性については第七章でまたとりあげる必要があるであろうと思われる。
- 5 「データ」として、哲学専攻の学生が既視感の不思議さにこだわることが多いことを挙げることはできるであろう。

- 6 未遂についての古典的哲学的考察でとりわけ重要なものにアリストテレス『詩学』第14章がある。『詩学』第13章と第14章の間にある（表面上の）矛盾は解釈上の大きな問題になっている。これについての最近の議論の一例、および論点の整理としては、M.Heath “The Best Kind of Tragic Poet” *Anasis De Filosofia Classoca* 2-(3) 2008